

# 「日中研究者による東亜同文書院研究」シンポジウム

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

—

二〇〇七年（平成一九年）七月二十八日（土）、午前二〇時から午後五時にかけて、愛知大学豊橋校舎記念会館三階小講堂で「日中研究者による東亜同文書院研究」のテーマによるシンポジウムが開催された。

このシンポジウムは二〇〇六年一二月に中国・上海の上海交通大学で開催された、史実に基づいた日中両国の研究者による書院研究のシンポジウムをベースにしている。その概略は、本誌前号に掲載したので、参照いただければ幸いである。

上海交通大学で開催されたこのシンポジウムは、従来イデオロギー色が濃かったり、主義の講演的発表が多かったのに比べ、歴史的史資料に基づいて相互に研究し、それをふまえて成果を出そうとしたものであり、したがって、書院に関する新たな知見も得られたりしたため、日本においてもぜひ再現するチャンスをつくりたいと考え、企画したものである。

幸いにも、今回の中国側グループのまとめ役である葉先生と毛先生はこの主旨を快諾して下さり、再現することになったもので、両先生には厚くお礼申し上げます。

とはいえ、完全な再現ではなかった。中国側では二人の研究者が体調不良で来日できなかった。そこでリーダー役の葉先生にお二人の分もあわせて発表いただけるようお願いをした。後述するように葉先生はこちらの願いを心よくお引き受けいただき、その願いをふまえた形で発表していただいた。

また、日本側でも変更があった。上海でのシンポジウムの日本側の発表者は馬場教授、薄井由さん、それに筆者（藤田）の三人であったが、うち、薄井さんは移住され、出席できなかった。しかし、愛知大学での新たな開催ということで、「中日大辞典」の編纂に深くかかわってこられた今泉潤太郎先生、それに本学東亜同文書院大学記念センターでポスト・ドクターの若手研究者である武井義和氏に、日本における東亜同文書院研究史の発表をお願いし、特に武井氏には中国側の東亜同文書院についての研究史を担当する欧七斤助教授と対応する形で発表をお願いした。

そして、全体のコメントーターとして、これまで東亜同文書院研究を中国側と同様にイデオロギーの対象としてきた従来の諸研究から脱却させ、まさに史実による新たな視点で再評価しつつ研究をすすめてこられた栗田尚弥先生にコメントをお願いした。

## 二

当日は愛知大学東亜同文書院記念センター運営委員の加納准教授の司会によってすすめられ、愛知大学の



武田学長のあいさつ

武田学長のあいさつ、次いで、今回の日中間の書院をめぐるシンポジウムを推進した霞山会の星理事のあいさつ、そして中国側を代表して葉教授があいさつをされ、本論へすすんだ。第一と第三セッションはセンター長の筆者が担当し、第二セッションは葉教授が担当した。

会場となった愛知大学記念会館三階の小講堂（定員二五〇名）は、二〇〇名あまりの来場者で埋まり、地元はもちろん、東京や大阪など全国各地からの来場者がみられ、「東亜同文書院」に対する近年の急激な関心の高まりをうかがわせることとなった。

### 三

十人の発表内容のうち、八人は昨年の上海交通大学での発表とは基本的に同じであり、前述したように、本誌前号に簡潔ながら紹介したので、ここでは省略し、それを参照していただきたい。また、具体的な発表内容は「愛知大学東亜同文書院大 学オープン・リサーチ・センター年報」第二号（二〇〇七年度版）に収録されているので、あわせてそれも参照していただきたい。

そのような中でなお補足すれば、まず、葉教授は、欠席された中国側研究者の二人分の内容をカバーし、東亜同文書院が上海交通大学と隣同士に位置した一九三七年以前の相互交流史、とりわけ学生達の政治的グ

ループや運動から、スポーツの交流までを紹介し、一種の蜜月時代が存在していたことを中国側に残る諸資料を用いて発表された。しかし、その関係が第二次上海事変による中国兵による書院校舎の焼失によって、書院が疎開した上海交通大学の校舎を借用することになって、崩れていったことは、第二セクションで盛助教授が上海交通大学側からの視点で発表された。従来、書院の校舎借用問題は、書院側からの視点での言及はあったが、上海交通大学側の視点で述べられたことは新鮮であった。

また、今回新たに発表者に加わった今泉潤太郎先生は、書院の中国語教育で用いられた中国語教科書『華語萃編』が、中国人教員の手も加えられた実践的内容として優れ、戦後、愛知大学になってからもしばらくの間は使用されたこと、書院時代に作成された華日辞典作成用のカード一四万枚が本間学長の返還願いによって返還され、『中日大辞典』として刊行されたこと、などが発表された。

また武井義和氏は日本における東亜同文書院研究史を時期別に区分されること、一九八〇年代までの書院をスパイ学校視するようなイデオロギー的研究が一九九〇年代に入ってから史実に基づいた研究へと脱皮していったことを発表した。このことは近現代の中国研究は、日本においても、史実に基づいた研究がイデオロギー優先の時代の中で遅れていたことを、書院研究の側面からも明らかにしたといえる。

そのような視点は、コメンテーターの栗田先生によっても指摘され、書院の実体をふまえた書院の再評価による書院研究の再編成の必要性を、設立主旨や指導者の思想、教育カリキュラム、一九三七年以降の書院側の悩みなどの視点からコメントされた。

発表後の質疑では、今後の日中研究者の書院研究への協力要望、書院にかかわる近衛文麿のポジション、

その他が活発に行なわれた。

#### 四

終了後の「リュミエール」での懇親会（無料）には多くの出席者が参加され、にぎやかに和気あいあいとした雰囲気の中ですすめられた。途中で豊橋市飯村地区のみやび会の人達による津軽三味線の演奏もあり、場を盛り上げた。

翌七月二九日（日）は、快晴の下、中国側一行をバスツアーでもてなし、豊橋駅から自動車輸出入の三河港―蔵王山頂（田原）からの三河港や大平野の眺望―二川本陣資料館―豊川稲荷と門前町を巡り、豊川門前町で和食を夕食に、懇親を深めた。特にツアーで日本の伝統文化に触れたことの喜びとお礼が伝えられた。なお、途中、豊橋市内のイトーヨーカドーでのショッピングも楽しんだ。

翌七月三〇日（月）は霞山会が招待して、雨天となったが、名古屋市内（名古屋城、熱田神宮）と明治村を訪れ、名古屋市内のショッピングも楽しんだ。

